

平成26年度  
環境学習支援士養成プログラム  
課題研究発表会  
(資 料)



滋 賀 大 学

## プログラム

日時 3月7日(土) 13:30～

場所 大津サテライトプラザ

13:30～13:35 開会

13:35～14:00 山本晴美(社会人コース)  
滋賀県の郷土食・伝統食に関する大学生の意識

14:05～14:30 原田康男(社会人コース)  
赤野井湾 ヨシとハスについての考察

14:35～15:00 青木誉拓(学生コース)  
昆虫の生活史を題材とした自然体験型環境教育プログラムの  
実践的研究

15:00 閉会

:

# 滋賀県の郷土食・伝統食に関する大学生の意識

山本 晴美（社会人コース）

## 1. はじめに

ユネスコ（国際教育科学文化機関）の「無形文化遺産」に【和食、日本人の伝統的な食文化】が登録された。きっかけは、京都の料理人たちが、日本の伝統的な料理を知らない子供が多くいるのに気付き「和食が減ぶ」という危機感だった。滋賀県には、琵琶湖があり、多種多様な湖魚に恵まれ、その水で、昔から農業も盛んで多種の農産物も生産し、食材としてきた。その自然と歴史に育まれた、滋賀の郷土食・伝統食がある。その郷土食・伝統食が大学生の日常に浸透しているのだろうか。そして、郷土食・伝統食の伝承を考えるため、次世代を担う大学生に郷土食・伝統食に関する意識調査を行うことにした。

## 2. 調査方法

質問紙による調査を行った。対象は滋賀大学教育学部の学生 60 名。男子 32 名、女子 28 名である。

## 3. 調査結果

- ①家庭で伝承されている郷土食の有無について
- ②郷土食を食べた場所、内容、作り方について
- ③食べたことある滋賀県の郷土食について
- ④郷土食に対するイメージについて
- ⑤滋賀県の代表的な 5 つの伝統食に対する意識について
- ⑥伝統食の伝承について

## 4. まとめ

今回の調査結果から大学生の郷土食・伝統食に対する意識や関心は、比較的高く、伝統食の伝承は必要であると回答した学生は、全体の 89%であった。しかし、食べたことが無い郷土食もあり、家庭での伝承は必ずしも良好ではない、ことが明らかになった。社会の変化と共に家族の形態や食文化も変化し、様々な対応が必要であり、今後の課題はある。

伝統食が次世代に継承される道筋としては、人の心が和食に向くように情報を発信し、技術の伝達をすることと家庭で祖父母や親が作ってきた味を守り、子供の頃からの味覚を育てることが重要であると考えられる。

# 赤野井湾 ヨシとハスについての考察

原田 康男（社会人コース）

## 1. はじめに

滋賀県では、1977年の琵琶湖での淡水赤潮大発生を契機に制定された「琵琶湖条例」を皮切りに、多くの環境関連条例が公布・施行され、琵琶湖の総合的な環境保全が積極的に行われてきた。また、「ヨシ群落保全条例」のように先進的な施策を全国で初めて行うなど、環境先進県として常にその先頭を進んできた。

近年では、水質の改善傾向も見られるようになった。ところが、外来植物の繁茂など新しい環境問題が生じている。

琵琶湖の中でも、赤野井湾は、環境問題とその要因が集約的に存在する水域である。それゆえに、多くの研究者や機関によって、様々な調査・報告が行われ、精度の高い情報が入手しやすい水域でもある。また、日本一とも言われるハスの群生地として知られ観光名所ともなっている。ところが、このハスが、赤野井湾の泥質を促進するなど、環境問題の要因でありながら、「ヨシ群落」の一部として保護されている。

本課題研究では、赤野井湾の環境問題を探求しながら、それを背景とし、この「ヨシ」と「ハス」の今後のあり方について考察する。

## 2. 文献による現状調査と現地での確認による考察

環境関連の報告書等の文献を参考に、赤野井湾における環境問題の現状を整理した。その分析から問題の主たる要因が、開発による湖辺の改変と地理的条件を含めた水域の閉鎖性にあることを確認した。そこで、琵琶湖総合開発を中心に、それまでの赤野井湾周辺も含めた開発について、時代背景や歴史を意識しながら、その必要性や環境への影響を調査し考察した。また、その際、「人と自然の共生」に結びつく事柄の有無についても注視した。それぞれの開発には、歴史的意義のあるものもあれば、時代の要請によるものもある。概して、前者の方が環境への影響は小さく、後者の方は修復困難な自然破壊が多く、環境への負荷は甚大であった。また、それらは、生命・財産を守る為と、より良くの欲求が勝るものへと分類する事ができる。開発とは「人と自然の歴史感」に立ちバランス感の必要なものである。

## 3. 固定概念や偏見の排除の試みによる考察

「ヨシとハスの今後のあり方」について考察するにあたり、本研究のスタートが「ハス悪し」の立場にあったため、偏った調査や考察とならないように、敢えて逆の立ち場で考察することを試みた。その結果、やはりヨシは保全すべきものとの確信を得、ハスにも保全すべき要素があるとの発見があった。また、環境保全の立場を強く持ちすぎると、問題の本質から離れてしまう危険性があり、注意が必要であることに気付いた。

## 4. 考察のまとめ

環境保全にとって、「人と自然の共生」というバランス感覚が必要である。その重要な要素として郷土史は有効的である。目指す自然環境の姿を過去に求めるのではなく、歴史的知見に立って未来を見つめる姿勢が必要である。特に、自然破壊の進んだ地域では、あるべき姿を未来に求めた創造的環境作りが必要である。

# 昆虫の生活史を題材とした自然体験型環境教育プログラムの実践的研究

14710 青木 誉拓

## 1. はじめに

昆虫は私たちにとって身近な存在であるが、その生態はあまり知られていないと思われる。学校教育では小学校で昆虫を取り扱うが、教科書等を用いた学習や学校内での観察がほとんどであり、学校外のフィールドで昆虫を観察・学習することは少ないと考えられる。

本研究では、年間を通じた昆虫の生活史を意識し、学習機会がほとんどないと思われる、昆虫の冬の越し方に焦点を当てた、小学生向けの学校外の環境教育プログラムを作成し、実践的に評価を行った。

## 2. プログラムの実践

イベント名は「森の冬じたく」で、実践は2013年11月30日10時から15時に行った。実施場所はふれあいの里センター及びその周辺フィールドであった。当日の参加者は6家族（大人9人、小学生8人、幼児3人）計20人であった。

### 【本プログラムのねらい】

- ①昆虫は変温動物であることを理解する
- ②昆虫は低温で温度変化が少ない場所を選び越冬することを理解する

### 【プログラム】

お話1	季節の変化を意識するため、夏から秋の昆虫の暮らしについて説明する
活動1	自分が昆虫ならどのような場所で冬を越したいか絵で表現する
お話2	代表的な昆虫の越冬形態を説明する
活動2	昆虫の越冬形態について理解を深めるため、越冬昆虫についてのクイズを行う
活動3	屋外でフィールド活動の説明を行う
活動4	家族単位に分かれ、フィールドで越冬昆虫探しを行う
活動5	見つけた越冬昆虫を一か所に集め、参加者全体で共有する
お話3	まとめに、昆虫はどのような場所で越冬し、なぜ活動せずに越冬するかを説明する

## 3. 成果と課題

イベントの最後に行った参加者への事後調査の結果から、本プログラムの成果と課題を挙げる。

### 【事後調査の結果】

実践直後に、絵や文章で記述する質問紙調査を行った。質問項目の「わかったこと」では、『こんな場所にいるんだなと思った』『昆虫は寒いから冬眠すると思っていたが違った』などの回答があった。

### 【成果】

- ①活動1では、参加者のほとんどが「昆虫は暖かい場所で越冬する」と考えていたが、イベント終盤になると、少数ではあったが「昆虫は寒いところで冬を越す」と考えが変容していた点
- ②越冬昆虫を探し出す過程で、昆虫がどのような場所で越冬しているのかを学ぶことができた点
- ③参加者が活動に楽しんで取り組んでいた点

### 【課題】

- ①小学校で学習しない変温動物という概念を含んでいたため、お話3の内容が難しかった点
- ②活動4で配布したワークシートの活用が不十分であった点